

慢性血栓塞栓性肺高血圧症に対する経皮的肺動脈バルーン拡張術の初期成績

武田 義弘、坂根 和志、大関 道薰、宗宮 浩一、星賀 正明、石坂 信和
(大阪医科大学 循環器内科)

慢性血栓塞栓性肺高血圧症(CTEPH)は、肺動脈に存在する血栓が器質化して肺動脈に狭窄や閉塞を引き起こし、その結果、肺高血圧症が慢性的に持続している疾患と定義される。肺動脈内の器質化血栓は肺動脈内の広範囲に及び、抗凝固療法では消失しないことが多い。なお、深部静脈血栓症が肺動脈を閉塞することで突然に発症する急性肺血栓塞栓症とは似て非なる疾患である。

労作時呼吸困難と低酸素血症を主訴に受診され、心エコー検査で肺高血圧症の所見を、また、肺換気血流シンチでミスマッチを認めることで本症例が疑われ、最終的に肺動脈造影検査で肺動脈の狭窄・閉塞像を認めることで確定診断となる。

近年、肺高血圧症に対するさまざまなクラスの治療薬が臨床使用可能となっているが、CTEPHでは、エンドセリン受容体拮抗薬などは適応外であり、基本的には肺動脈の狭窄を解除しなければ肺高血圧症の改善は得られない。近位部血栓の治療として内膜摘除術があるが、末梢型のCTEPHに対しては、肺動脈バルーン拡張術による治療の有用性が注目されている。

当科では2016年より同治療を開始し、2017年4月までの間に8症例(平均年齢66.4歳、全て女性)15回のカテーテル治療を行った。結果、合併症の出現は無く、また、治療前後で平均肺動脈圧は41.4mmHgから32.2mmHgと改善を認めている。本会では当科でのCTEPHに対する肺動脈バルーン拡張術の取り組みと初期成績について報告する。
